基肄城築造1350年

基肄城を知る⑤

基肄城の城壁と門
―土塁、石塁、門礎―

「基肄城跡は、土塁に囲まれている。」

基肄城跡が説明されるときに、よく聞く表現の一つです。それでは土塁とは、一体何でしょうか？

「土塁」とは、土で積み上げた防塁（敵の攻撃を防ぐためのとりで）のことです。土を層状に積み重ねることによって、より固く強くなるようにつくられています。このような方法は「版築工法」と呼ばれ、杵（築）で突き固めてつくったと考えられています（イラスト1）。版築工法は、全国的に古代山城の城壁や建物の基礎などにも用いられています。町内では、基肄城跡の土塁のほかに、南から来る敵を食い止めるためにつくられたと考えられる関屋土塁（JR基山駅近くにある）も版築工法によってつくられたことが発掘調査によってわかっています。

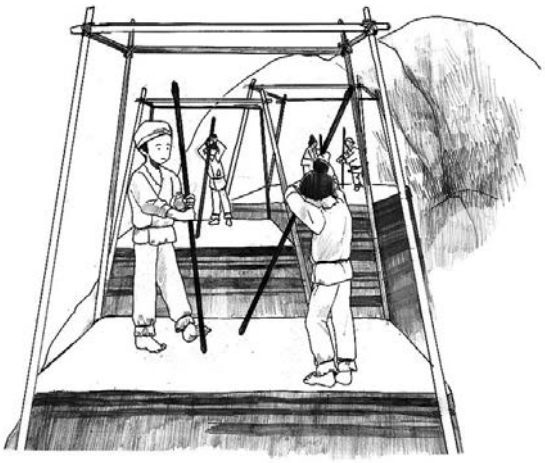

イラスト1　版築工法のイメージ

一方、土塁ではなく石を積み上げた「石塁」によってつくられているところも基肄城跡で確認できます。

基肄城跡では、推定を含め、北帝門跡、東北門跡、東南門跡、南門跡（水門跡）の4つの門が想定されています。このうち、北帝門跡、東南門跡、南門跡（水門跡）では、現在でも積み上げられた石を確認することができ、石塁によって門がつくられていたことが想定できます（写真1）。石塁で地形的に攻めやすい谷部をふさぐことにより、敵からの侵入を防ぐという、城としての防御力を高める目的があったものと考えられます。

写真1　北帝門跡
写真中央部に積み上げられている石が見えます。

石塁を確認できない東北門跡では、門の礎石である「門礎」が残っています（写真2）。このような「門礎」は、基肄城跡のなかでは、現在のところ唯一東北門跡でしか確認されていません。大野城跡では、川の中から門礎が見つかったという例もあります。かつては、門に設置された門礎が何かしらの原因で、他の場所に動いていることもあるようです。基肄城跡でも今後、どこかで新たに発見されるかもしれません。

写真2　東北門跡の門礎
丸い穴は、門の扉の軸を受けるものです。
※現在、保存管理のため、見ることはできません。

門礎は、大きな石に、丸や四角などの人工的な穴があることが特徴です。今度、基肄城跡を散策するときに、探してみてはいかがですか。

※問合せ先
教育学習課
ふるさと歴史・文化係
電話92―2200